

# いもじ 鋳物師山田家

## 芸藩通志

廿日市山田氏 先祖鎌倉の人、承久年中、山田次郎貞則、鎌倉より来たり、厳島神社修営の鉄具を造る、よりにて田宅を賜い、遂に廿日市の人となり、世に鋳工たり、宮島にも宅地を給す、厳島神社永世他家の鋳物を用いられず、厳島と廿日市の人家、釜鍋も他方の所鋳を用いしめざるよし、云々……。

## 山田家歴代系譜 国郡志下調書より

系譜	氏名	死亡	系譜	氏名	死亡	系譜	氏名	死亡
初代	山田次郎貞則	不詳	十一代	山田新六郎繁綱	不詳	二十一代	山田平右衛門	<sup>1754</sup> 宝暦4年
二代	山田次郎少尉貞信	不詳	十二代	山田讚岐守繁信	不詳	二十二代	山田文次郎	<sup>1768</sup> 宝暦8年
三代	山田與六郎貞利	不詳	十三代	山田治部丞	不詳	二十三代	山田次右衛門	<sup>1818</sup> 文政元年
四代	山田彌太郎貞宮	不詳	十四代	山田興右衛門久種	不詳	二十四代	山田次右衛門	<sup>1824</sup> 文政7年
五代	山田惣四郎貞暁	不詳	十五代	山田宗次郎秀久	不詳	二十五代	山田次右衛門	<sup>1865</sup> 慶応元年
六代	山田興右衛門家政	不詳	十六代	山田次右衛門證友	不詳	二十六代	山田次右衛門	<sup>1870</sup> 明治11年
七代	山田興太郎貞綱	不詳	十七代	山田次右衛門貞友	<sup>1689</sup> 元禄2年	二十七代	山田国吉	<sup>1890</sup> 明治31年
八代	山田太郎左衛門忠正	不詳	十八代	山田次右衛門貞榮	<sup>1721</sup> 享保6年	二十八代	山田明三	不詳
九代	山田壹岐守貞次	不詳	十九代	山田次右衛門貞能	<sup>1733</sup> 享保18年			
十代	山田太夫丸	不詳	二十代	山田次右衛門慰貞幹	<sup>1756</sup> 宝暦元年			

廿日市の文化 第8集「鋳工 山田次右衛門特集」及び同所収「鋳物師山田次右衛門に就いて」磯貝勇著抜粋によれば、後述の草津の河面道三郎氏編 山田家系譜（金屋事）は系譜と墓石が一致せず、疑問有という。上記表は系譜に重きを置いて加工作成したものである。

## 山田家のその後

承久3年(1221)、山田次郎貞則、厳島造営の時鋳工として鎌倉より呼びよせられ、廿日市に宅地を与えられ、屋号を金屋と称す。天文年間には久枝・山田氏が活躍した。

国郡志下調書によれば、十八代次右衛門貞榮の元禄8年より、大里正・天下送りと鋳工のほかにも活動が増え、いつのころからか本陣も経営、本陣の山田と通称され、この地方一の名家を誇っていた。厳島神主家の神領衆糸賀氏と関係があったとされる。

本陣は、江戸時代以降の宿場で大名や旗本、幕府役人、勅使、宮、門跡などの宿泊所として指定された家。原則として一般の者を泊めることは許されておらず、営業的な意味での「宿屋の一種」とはいえない。宿役人の問屋や村役人の名主などの居宅が指定されることが多かった。また、本陣に次ぐ格式の宿としては脇本陣があった。

鋳物師から本陣役に活動の重点が移っていくなか、二十一代山田平右衛門以降に於いて作品が激減しているのである。

宝暦8年(1758)地御前西向寺(じごぜん さいこうじ)の梵鐘は、海田の冶工(やこう)植木新助慰藤原貞行が製作している。

更に宝暦 10 年（1760）芸備の太守浅野公が地御前社に梵鐘の寄進をされた時の冶工も海田の植木貞行が製作を受けている。

本来ならば長い歴史を持つ地元の山田家に依頼があつて当然であろう。しかし海田の植木氏に依頼されたのは、当時の二十三代次右衛門が受けなかったか、技量を認められなかったか、製作能力がなかったか、家運が傾きかけていたか等が考えられる。

やがて文政 2 年（1819）の厳島神社五重塔擬宝珠（ぎぼし）を最後として、鋳物師としての活動を終える。

急激な時代の変化が漂う幕末にあつて、廿日市も山田家も共に影響を受けるのである。

元治元年（1864 年）と慶応 2 年（1866 年）の 2 回にわたり、江戸幕府が長州藩の処分をするために長州藩領のある周防国、長門国（防長二州）へ向け征討の兵を出した長州戦争、特に慶応元年（1865）第二次長州戦争の時、広島領内への侵入阻止の為、広島藩は廿日市の町屋に火を放ち、町屋はその多くが灰燼に帰す（かいじんにきす・跡形もなく灰になってしまう）。

文久の改革（文久 2 年（1862 年）に江戸幕府で行われた一連の人事・職制・諸制度の改革）以後、参勤交代の形骸化が進み、明治維新（慶応 3 年（1867 年）の大政奉還、王政復古以降の改革）の政変により、参勤交代が行われなくなると本陣は有名無実となり、明治 3 年（1870 年）に明治政府より本陣名目の廃止が通達されて制度としての本陣は消滅した。

それに呼応するかのよう、鎌倉以来の旧家・山田家も当主に人を得ずことから変貌を余儀なくされた。明治 20 年（1887）前後、二十七代山田国吉の不肖（ふしょう）により、家産を蕩盡（ほうとう・財産などを使い尽くすこと）して一家離散し、承久（鎌倉時代）以来 660 有余年連綿として鋳工史上に不朽（ふきゅう）の名をとどめ幾多の作品を世に残した山田家壊滅の悲運に遭遇した。

明治 31 年二十七代山田国吉死亡、山田家絶家となるため草津の河面道三郎の四男明三が山田家を相続。鋳物師の名門山田氏は明治 31 年（1898）遂に 絶家してしまった。

### 鋳物工場跡

天満宮駐車場前、中央市民センター東側の一画が工場の跡で、この辺一帯の土地を掘ると鋳物型に使用した黒色の砂土の塊や焦げた土がでるといふ。

慶応 2 年（1866）第 2 次長州戦争で町屋の大半が焼失した際、山田家も焼失した。昭和 44 年当時、その一画には金光教の裏庭に柿の古木が一株あつた。これは山田家にあつた本陣の柿の木と伝わる。

		
2007 年 8 月 10 日撮影当時の本陣跡風景 石碑はこの場所にあつた	2008 年 5 月 24 日桧山合同事務所更地として売り出され、石碑は東隣の中央市民センター内に移動	2008 年 5 月石碑移築済、2014 年解体され、2016 年 4 月初迄いづこに・・・